



東日本大震災被災地における  
第2回ボランティア活動報告  
「絆・ベルリン」

**Dr. Frank Brose**

## 第2回の「絆・ベルリン」ボランティア活動報告

4月3日から11日まで、「絆・ベルリン」は二度目のボランティア活動を実施しました。

去年の秋から、絆・グループ構成が変化しました。特に最初のグループに参加した学生は、半年後にまた大きな旅行をすることは難しく、今回の活動には参加できませんでした。

しかし、友だちや友人、新聞、ソーシャル・ネットワーク(ミクシィ)などで、絆グループを知った人たちが、私たちのグループに参加することになり、結果的には16人で、また東北地方へ向かうことができました。

老若男女の一行は8人の日本人と8人のドイツ人でした。19歳の高校を卒業したばかり青年から71歳の建築家までいろいろでした。

ひとつには私たちは 去年の秋のように同じ場所で同じ仕事(ガレキ撤去作業)をし、そして、もうひとつには 陸前高田市の近くにある長部で、新しい公民館建設工事着工のための地鎮祭に参加しました。

さらに、被災者向け仮設住宅と市政、高等学校などと接触して、新しいプロジェクトのために話し合いをしました。

### 4月3日(火)

千葉県市川のサポーターの家で朝早く起きて、ぎゅうぎゅう詰めの電車で東京駅に行きました。

新幹線の乗り場で6人の絆・メンバーと落ち合い、新幹線こまちに乗りました(3人のドイツ人はその前日ベルリンから日本へ来ていました。2人のドイツ人は現在日本に住んでいます)。

そして、ソーシャル・ネットワーク mixi を通じての友人は愛知県から来ました)。数日後、その外の4人の日本人の友達も加わりました。

一関市を経て新花巻駅に着きました。そこで電車に乗り換えて、昼過ぎに遠野駅に着きました。

その日の午後に、もう3人のメンバーが次の電車に来て、総勢12絆・メンバーは遠野まごころネットのボランティア・センターにチェックインしました。



まごころネットという特定非営利活動法人(NPO)は日本の巨大地震の後で2011年4月の下旬に結成されて、遠野市を拠点として沿岸部での活動を展開しています。津波で全滅になった地域は遠野市から約40キロ離れています。去年の晩秋まで、「遠野市総合福祉センター」がボランティアセンターとして利用されました。その大きなホールでは200以上の人が泊まることができました。

現在、遠野市政は総合福祉センターを必要としていました。ですから、ボランティアセンターは引っ越しなければなりません。2011年12月4日に遠野まごころネットの新施設への移転が完了しました。新しい拠点は遠野駅から徒歩で10分ぐらいかかります。



新しいまごころ寮は前より小さいです。男性の部屋と女性の部屋の広さは7畳と横に7畳です。



寝る時は、一人1畳ほどで寝ていますので、全部で80人ぐらいが泊まることができます。



壁側にある棚へ荷物が置かれています。部屋の真ん中には灯油ストーブがあります。

男性の部屋で、毎日午後5時半に活動報告等のミーティングがあります。私の誕生日だったので、ちょっとスピーチをしなければなりませんでした。



午後6時に、福沢先生と建築家のグーチョさんと私は「遠野まごころネット」から夕食に招かれ、駅近くのレストランに多田理事長とプロジェクト・マネージャーの及川さんと顧問の荒川さん、さらに事務長の遠藤さんと一緒に行きました。



私たちは長部・公民館のプロジェクトについて話し合いました。絆・ベルリンとベルリン独日協会は及川さんと数か月前から連絡を取り合っていました。グーチョさんは公民館の建築設計図について詳しく説明しました。（そのプロジェクトの委細について、この報告の下のほうを読んでもください）。

最後に、プロジェクトの成功を祈って乾杯しました。誕生日だったので、すぐ2回目の乾杯をしました。

まごころ寮で消灯時間は夜10時～朝6時になっているので、私たちは会合の後で、急いでボランティア・センターに帰らなければなりません。ぎりぎりの時間に、寝袋の中に、潜り込むことができました。

その夜、冷たい風が激しく吹いていました。安全のためという理由で、灯油ストーブは就寝時に消されました。ですから、夜はちょっと寒くなりました。日の出前にトイレに行くと、部屋に続く廊下ではちょっと雪が屋上との隙間から降り込んでいました。

#### 4月4日（水）

翌朝目が覚めたら、大地は雪におおわれていました。家の中に降り込んだ湿気のために床に新聞紙を敷きました。



我々は朝ご飯後に簡単な会合のため集まった。

もともとは多くの絆・メンバーはボランティア活動をし、福沢先生とゲーチョさんと私しか新しい公民館建設工事着工のための地鎮祭に行く予定でした。しかし、全部のボランティア活動は嵐と雪のために中止になった。ですから、我々はすべてのメンバーが地鎮祭に参加することに決めました。

あいにく、吹雪で東北新幹線が不通になったので、岩手県は足を奪われました。

交通が麻痺したので、在東京ドイツ大使館の書記官は 陸前高田への往路を途中の仙台駅で止めなければなりませんでした。ベルリン独日協会副会長は一ノ関駅まで来る事になりました。

翌朝にスケジュールがつまっているので、書記官は 仕方なく東京に帰ってしまいました。

私たちはベルリン独日協会副会長を一ノ関駅に出迎えに行きました。そして、我々は貸し切りバスで40キロぐらい離れた海岸に行きました。陸前高田市を経て長部に着きました。

津波で最大の被害を受けた陸前高田市は、1554人が亡くなってしまいました。まだ304人が行方不明です。住民の死者が7.7%です。本当に恐ろしいです。町の80パーセントが高さの15～17mの津波で水浸しになりました。壊れた家屋は3341戸です。

長部は陸前高田市の中心からたった3キロメートルぐらいしか離れていない区域です。巨大地震の前に、長部は3回津波をかぶりました。明治三陸津波（1896）の波高は3.5m、昭和三陸津波（1933）の波高は3.8m、チリ地震津波（1960）の波高は4.6mでした。

チリ地震後で、海岸に沿って高さ6.5mの防潮堤が建てられました。しかし、去年の3月11日に、高さ13.5～14.7mの津波が長部を襲いました。



左：長部、震災津波前の航空写真（日本地理学会 津波被災マップ） 右：長部、2011津波後の航空写真（Google Map）



長部：2011津波遡上範囲（日本地理学会 津波被災マップ）

この地域は、家屋や田畑の約 2/3 を失いました。また死傷者がたくさんでました。

残念ながら、長部漁港の近くにある水産加工工場が壊滅的な被害を受けました。800 トンもの冷凍水産物（サンマ、サケ、イクラ、ワカメなど）が広範囲に散らばりました。

夏から秋まで、腐ってしまった魚はものすごい悪臭を発散し、数え切れない小ハエが飛んでいました。

12 ヶ月間、何百人ものボランティアは長部地区を清掃しました。延べ 10,000 人のボランティアはその「サンマ作戦」と呼ばれた面倒な仕事をしたそうです。清掃作業の後で、畑に野菜や麦を作り始めました。作業小屋や製材所も建設されました。

今、長部の住民は自分たちの力で村の再建に乗り出しています。長部漁港から直線に1キロ離れた上長部（かみおさべ）には まごころネットが中心になってコミュニティセンターを建てる予定です。

再建の第一歩として、破壊された公民館の代わりにコミュニティセンターが新設されています。このプロジェクトは、絆・ベルリンの仲介によって、成立しました。

プロジェクトリーダーは、遠野・まごころネットです。出資はベルリン・独日協会がします。

建築家は20年以上日本に住んでいるドイツ人のグーチョさんです。絆・メンバーなので、もちろん報酬はいらないとの事です。

午後3時半に、私たちは上長部会場にようやく着きました。天気がだんだん悪くなりました。

到着直後に、建設工事着工のための地鎮祭が始まりました。月山神社の神主が来たとき、天気が吹雪混じりとなりました。

本当に、身を切るような寒風が吹いていました。しかし、よい兆しだと思います。吹雪の中で執り行われると、決意に満ちた厳粛な御神事になるのだそうです。そして、強い風で建築用地が固まるということです。

まずは、神主は慰霊の黙禱で地鎮祭をお導きました。次はお祓いです。公民館建設予定地の四隅が清められました。



神職さんは お祓い中にいろいろな祝詞を上げました。たとえば、建設工事に当たる作業員の安全の祈願が行われました。

鍬入れの儀では、長部の区長さんや独日協会副会長、まごころネットの代表、絆・ベルリンの代表（福沢先生と建築家のグーチョさん）は個別に、成功を祈願し、盛り砂の砂にくわを入れ、力強い声で「えいっ、えいっ、えいっ」と言いました。



最後に、玉串奉奠では、個別に土地の安泰と工事の無事を祈りながら、玉串を神様に捧げました。



地鎮祭の後で、近くにある製材所の中では式典が催されました。歓迎の言葉の後で、2人の地元民が太鼓の伴奏で神楽舞を舞い、会場の皆さんを楽しませました。

その後で、ベルリン独日協会副会長の竹谷さんがスピーチして、区長様に、上長部公民館建設のための支援金6万6千ユーロ(約700万円)の銀行小切手模型が手渡されました。



その外のスピーチが次々と続きました。私は不在のドイツ書記官のスピーチを代読しました。日本人の絆・メンバーがそのドイツ語のスピーチを和訳しました。

スピーチの後で、熱々の豚汁を飲みながら、活発に会話を交わしました。美味しいスープを飲んで、冷たい体にとっても心地よい暖かさが伝わってきました。皆さんの望みは長部コミュニティセンターが復興の推進母体になることです。

記念写真をした後、バスで遠野へ帰らなければなりませんでした。



出発の際に、みんなは互いにさようならと手を振っていました。

4月5日（木）

今日は遠野・ボランティアセンターから大船渡に引っ越ししました。出発の前に、絆・ベルリンはごころネットにドイツで集められた支援金を手渡します。

そして、連帯のしるしに、私たちはベルリン旗の上に絆・メンバーの名前を書いて、その旗をまごころネットにさしあげました。



遠野駅から路線バスで大船渡に行きました。去年と同じように、大船渡の福祉の里センターに泊まりました。

去年は大船渡の福祉の里センターの上層階はボランティア・センターとして利用されましたが、現在は経営はすべての部屋が平常通り利用されています。

去年の秋、100人を越えるボランティアの人々はその福祉の里センターに宿泊しましたが、今年の春は、ボランティアは絆・ベルリンの12人だけでした。私たちは部屋を三つ借りることができました（女性は一つの部屋に、男性は二つの部屋に泊まりました）。

その日の午後、絆・グループは大津波で壊滅的被害を受けた大船渡港の隣にある地域を通りました。

巨大地震のとき、高さ10メートル以上の津波が大船渡市を襲いました。339人が亡くなりました。3629戸の建物が破壊されました。

昨秋には、被害を受けた建物の中に、大きな残骸の山がいくつもそびえていました。そして、半壊の家の中に大きな船もありました。

去年と比べて、良い方向に光景が変わっていました。半年前に訪れた被災地の現状に私たちは感銘を受けました。去年の秋から、たくさんの作業が行われていました。



あちらこちらにまだ瓦礫の山がありますが、多くの瓦礫が除去されていきました。粗い瓦礫が取り除かれた被災地では、まだ半壊のコンクリート建築物が点々と散在しています。市政によると、まだ大破した建築物を50戸取り壊さなければならないそうです。しかし、いくつかの大破した建物は修復することができます。



津波災地ではいろいろな車道のレベルが高さ1メートルほどアップされました。そして、いろいろな場所では、半壊のコンクリートビルが現在修復中です。早くも新しい家が建てられています。道の途中で、私たちは地鎮祭も見かけました。

また、2011年12月20日には、被害市街地に、「大船渡・屋台村」という仮設飲食店街が、設置されました。店主も被災者です。



中華料理や鍋料理、おでんに寿司、お好み焼き、沖縄料理など様々な味を提供する20店舗が出店しています。素晴らしい喫茶店もあります。ここでは一休みして、美味しいコーヒーを飲みました。

最後は、隣にある丘に登りました。丘の上にある加茂神社から、津波で破壊された市域を見渡しました。ちなみに、大地震のとき、大勢の人たちがここに避難しました。

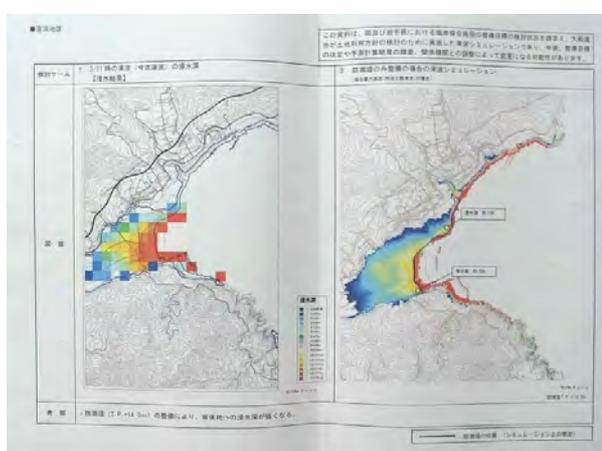
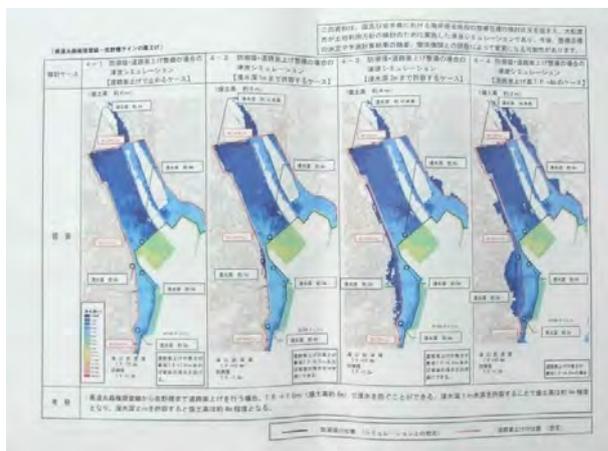


午後 5 時に大船渡市役所に行き、市長の戸田公明氏と会見しました。市長とは、英語で話しました。

まず、彼は大船渡市の現在の様子を写實的に描写しました。現在、7500人が仮設住宅に住んでいます。2776家族が家を失いました。津波で壊された地域の30パーセントが今までに撤去されました。新しい家について、二つの大問題があります。どこに建てるかと、資金繰りをどうするかです。

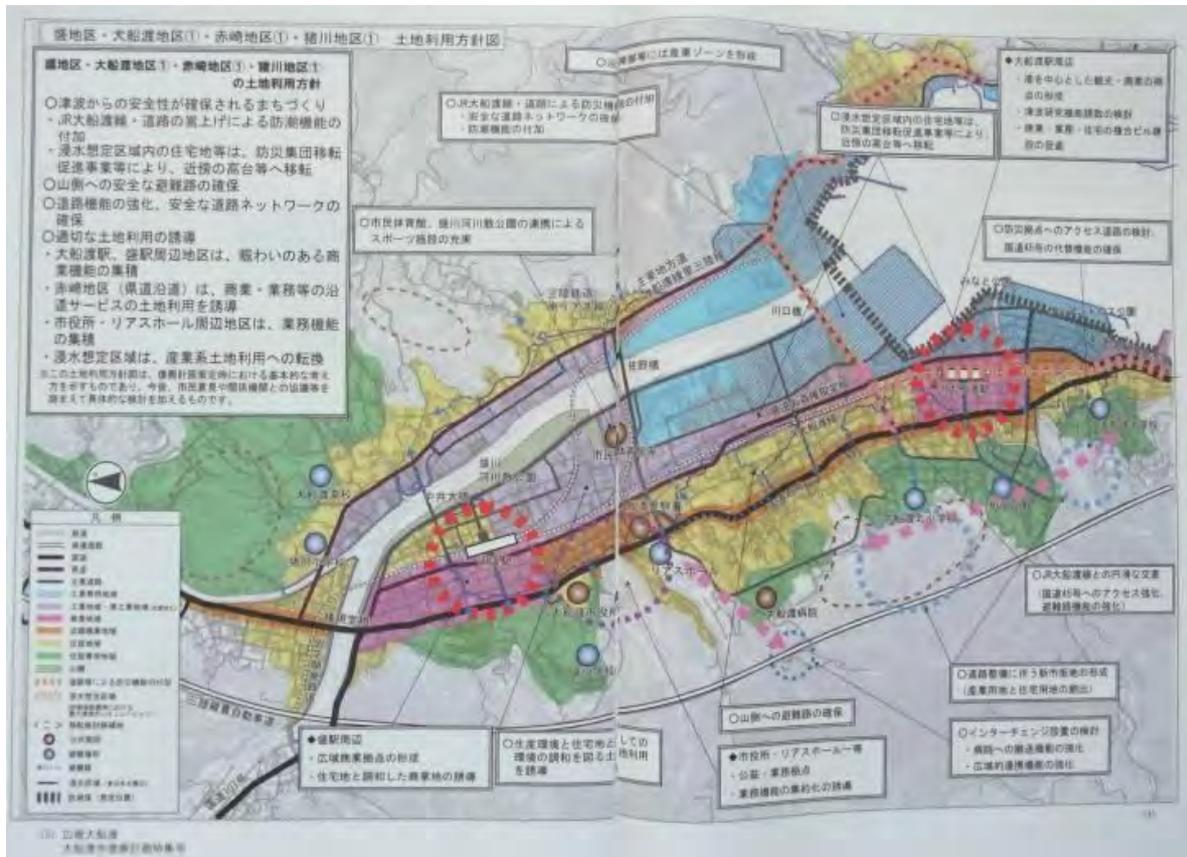
都市行政は地区整備計画を策定しました。防災都市計画です。沿岸部の津波の危険な箇所を調べ、掲載しています。新しい築堤の高さのために、津波のコンピューター・シミュレーションも算出しました。

絶対低地には、絶対に人間が住んではいけないと説明しています。しかし、職場としては低地でも可能です。



津波シミュレーションモデル (左：大船渡市、 右：大船渡市三陸町吉浜)

大まかに言えば、海拔 10 メートル以下の土地は住宅地域として危険な箇所です。



大船渡地区の土地利用方針図：（緑色 = 住居専用地域、黄色 = 住居地域、オレンジ色 = 近隣商業地域、紅紫色 = 商業地域、紫色 = 工業地域、はなだ色 = 工業専用地域）

民有の地所なので、国家的行動の自由裁量の余地には限りがあります。高台へ移り住むことを薦めています。やんわりと経済上の圧迫を加えるために、確実な敷地で新しい家を建てる人々だけ政府からの支援を受けることができるそうです。地主の 70 パーセントは承諾したが、15 パーセントは不承知です。15 パーセントは今まで決心がつかないでいます。公共住宅建設と個人住宅建設には国庫補助を受けることができます。

失業が大問題になっています。2011年2月に、大船渡市では2600の会社がありました。1400の会社は津波で全壊しました。この中の25パーセントは廃業しました。75パーセントは再出発するつもりです。市長は、経済の復興が4～5年間ぐらいかかると言っています。

しかし、市長から良い知らせもありました。2010年6月の「11の環境未来都市」の政府による決定があります。2012年1月18日に、被災地6都市と、その他の5都市が「環境未来都市」に指定された。

岩手県では大船渡市と陸前高田市と住田町が選ばれています。「気仙広域環境未来都市の2市1町」と呼ばれています。



環境未来都市の認定書

目標は人道的な町づくりです。省エネやハイテクノロジーなどのいろいろなプロジェクトが計画中です。たとえば、ソーラー発電所やリチウムイオン電池工場、木造環境住宅団地を建設するつもりです。

住民の平均年齢が60歳なので、高齢者に優しい町にする予定です。ですから、高齢者にやさしい近距離交通手段を敷いて、「コンパクトシティ」を創設するつもりです。農業の復興も予定されています。



福祉の里センターへ帰ってから、ミーティングをして、「11の環境未来都市」の政府決定を論じました。本当にアンビシャスな計画ですが、経済的に十分余裕があ

りますか。 11 の環境未来都市に対して、全体で 約 10 億円が可決されたので、1 町当たり 1 億円以下だそうです。しかも、町は支出の 2 分の 1 を負担しなければなりません。それでも、きっとよいチャンスだと思います。

#### 4月6日（金）

ひどかった昨日の嵐が終わって、天気がよくなりました。去年、私たちは全部の食べ物をスーパーやコンビニなどで買わなければなりませんでした。今年の大船渡滞在中は、毎朝7時に、福祉の里センターで美味しくて安い日本の朝ご飯が食べられました。

その後で、バスで大船渡町に行って、そこから大船渡市社協復興ボランティアセンターに歩いて行きました。

ボランティアセンターは前と同じ場所にあります。作業時間が減少されました。7日間から3日間に短縮されました。その週はボランティア派遣日が4月8日までの計3日間（金曜日～日曜日）です。



絆・メンバーは3つの班に分けられました。作業内容は以下の通りでした。

#### ① 「マレーシアハウス」

1つの班（6人の絆・メンバー）はいわゆる「マレーシアハウス」に行って、屋外作業を手伝いました。

マレーシア政府からの寄附ということで、通称として「マレーシアハウス」と呼んでいますが、「33キッチンハウス」というのが正式名称となります。

これは大船渡から5キロぐらい離れた日頃市町（ひころいちちょう）にあります。「非営利活動法人・さんさんの会」が建設中です。そのハウスは完成後、厨房設備と多目的コミュニティスペースが入ります。



「さんさんの会」とは、大船渡で2011年5月以来、支援を必要とする被災者の方々に、「おかず」配食サービスを続けている団体です。大船渡のリアスホールから毎日「おかず」を現在仮設住宅に入っている被災者に、届けている民間グループです。

「33キッチンハウス」は完成後、ここから「おかず」を配布する予定です。配食の対象者は身障者やお年寄りなどです。また介護等で働きに出ることが困難なご家庭も含まれます。

建物の建材はマレーシアから届いています。経済援助にかんしてはBAJ（ブリッジエーシアジャパン）を通してJPF（ジャンプラットホーム）から支援をうけています。

今日、手伝ったのは、水道管を埋める作業です。数週間前には溝を掘って、溝に下水道を入れました。今日はその溝を土と立ち枯れの竹で埋める作業でした。



## ② 「越喜来：清掃作業」

2つ目の班（3人の絆・メンバーを含めて8人のボランティア）は越喜来（おきらい）に行って、側溝を掃除しました。その班に絆・メンバーの山田ボヒネックさんと妻と私がありました。日本人のボランティアは老若男女8名の一行です。彼らは秋田県と盛岡市、東京から何度も大船渡での被災地に来て、支援活動を行いました。聞けばそのボランティア者は、これまでの作業活動を通して知り合い、グループを結成し、定期的に連絡を取り合い、お互いの都合の時間・日程を合わせては大船渡ボラセンに来るのだと言いました。

越喜来は大船渡・ボランティアセンターから10キロぐらい離れた小さな町です。町は1956年に大船渡に合併されました。

越喜来湾の堤防は11・5メートルでした。その堤防高は、100年に1度程度の津波の想定に基づいていました。しかし、東日本大震災の津波の高さは16・9メートルでした。第1波逆流で堤防は後ろから壊れました。そして、次の波は町を破壊しました。



今日の作業は泥で詰まった側溝の掃除でした。私たちは泥を土嚢袋に詰めていきました。



一人が泥をスコップですくって、もう一人が袋の口を開けて待っています。半分以上入れると口を締めまて、手押し車に積んで、隣にある置き場に運んでいました。



深さが約1メートルある側溝は水の滴る泥濁で詰まっていました。ひざまで達する泥濁でしたので、仕事が本当に大変でした。だんだん服は汚くなりました。

この作業日はたまたま越喜来海岸沿いには強風が寒く吹き荒れ、昼食を取ろうとする我らは大船渡からここまで作業仲間や作業用具を運んでくれたマイクロバスに避難しました。

そしてこのバス中の昼休みにかれこれ8名の即席ボランティア仲間は、自分の座席から後ろを向いたり斜めに身体をひねりながらそれぞれ「何故、自分が今ここにいるのか。その動機は何か。何を大切に思うのか」を一人ずつ語り合った。山田ボヒネックさんが同時通訳をしていましたので、互いによく話すことができました。バスの中の私達を深く結ぶのは、この沿岸部に荒れ狂った自然の暴力的な破壊力とそれによって引き起こされた居住者の苦痛への想いであった。幾千と累積する屍、壊滅状態になった絶景の地と住まう町、フクシマ・ダイイチの原発放射能禍害のため、故郷を永久に離れなければならなくなった人々...私達はこの地域の未来を築くためのボランティア支援作業を共に行うことにより、「日独友情の絆」がさらに強固なものになってきていることを深く感じ取っていた。

私たちは その町では去年の秋のように同じ所で同じ仕事をしました。同じ道の端の約200メートル前方で働いていました。去年と比べて、良い方向に状況が変わっていました。すでに行われた作業が甚大なので、私たちは本当に深い感銘を受けました。

去年の秋は、どちらを向いても、たくさんの瓦礫が山のように積み重ねてありました。津波の破壊力が本当に恐ろしかったです。コンクリートも粉砕されていました。罹災地はゴミためのように見えました。しかし、今年の春には多くの瓦礫が除去されていました。



去年の秋（大地震の半年後）



今年の春（大地震の1年後）

路傍で働く間中ずっと、砂を積んだトラックがたくさん通りました。津波被災地では造営地の土地を高くするために、砂が積み上げられています。



復興が始まりました

### ③ 「ゆうゆうファーム」

3つの班（2人の絆・メンバーを含めて5人のボランティア）はゆうゆうファームに行きました。ゆうゆうファームとは仮設住宅の住民の方とボランティアさんが協力して作っている畑です。

そこで草刈りをして、防護ネット張りしました。

仕事の後で、皆はマイクロバスでボランティアセンターに帰って、そこから福祉の里センターまで歩いて行きました。

その日の午後、ソーシャル・ネットワーク MIXI を通じての友人が私たちを訪問しました。彼は福島県から車できました。被災地を通るときの車のカーナビに残された街の記憶とのギャップに随分悲しい思いをしたそうです。

彼と会えて、私はとてもうれしかったです。今年の日本への旅行前は、バーチャル連絡しかありませんが、実際に知り合いになりました。私はそれを本当にうれしく思いました。

夕食後に、私たち皆はロビーで会合して、飲みながらたくさん話をしました。

#### 4月7日（土）

今日も4月とは思えない寒さの大船渡です。また、朝ご飯の後で、大船渡市社協復興ボランティアセンターに歩いて行きました。



今日も昨日と同様、絆・メンバーは3つの班に分けられました。作業内容は以下の通りです。

#### ① 「個人宅の泥出し」

1つ目の班（5人のボランティア）は日頃市町のとりにある個人宅に行きました。そこで半壊したレストランの中を清掃しました。

その班に2人の絆・メンバーが加わっていました。ベルリンに住んでいる日本人の絆・メンバーのお母さんも東北に来て、その日に娘と一緒に働いていました。

津波で一階が完全に浸水してしまったレストランの片付けをしました。もう津波から一年たったいたので、レストランの床も壁も、茶色の乾いた土とほこりで覆われていました。ものすごい埃で苦しかったですが、掃除をしているうちに、綺麗なタイルの床が見えてきました。

まだ使えるお皿やグラスもたくさん見つけました。被害を免れた食器を一箇所に拾い集めて、きれいに洗いました。

今後は、一階を駐車場にして、二階、三階でレストランを再開するそうです。

顔と衣服が汚れました。屋内で全部はほこりを浴びたので、彼らはとても汚れました。

仕事の後で、その5人のメンバーはほこりまみれの衣服を身につけたままボランティアセンターへ帰りました。

## ② 「マレーシアハウス」

2つ目の班（7人の絆・メンバーを含めて12人のボランティア）はまた「マレーシアハウス」に行って、下水工事を終えました。



昼休みに、ボランティアには「さんさんの会」から美味しいスープが配られました。

## ③ 「側溝の泥出し」

3つ目の班（4人の絆・メンバーを含めて8人のボランティア）はまだ越喜来に行って、道路の側溝を掃除しました。マイミクの友人と山田ボヒネックさん、私たち夫婦が参加しました。

午前中は、昨日と同じ場所で働いていました。しかし、側溝が海の方に近づくと、ますます深くなるので、3時間後、仕事を途中でやめなければなりませんでした。



仕事を続行するためには、大きい道具が必要だと思います。私たちは全部の土嚢をピラミッド型に重ねていきました。



その後で、川の反対側に行って、小学校の前の泥で詰まった下水道をきれいにしました。そこでは、まずコンクリートのプレートを二人で持ち上げなければなりませんでした。



粘土質の泥の中には瀬戸物やガラス、プラスチックの破片などがぎっしり詰まっていた。

海から約200メートルのところにある3階建ての越喜来・小学校は大津波に襲われて、完全に破壊しました。



奇跡的に、すべての児童は危うく死を免れました。校舎の道路側は、高さ約5メートルの崖です。従来の避難経路は、校舎の1階から外に出て、坂を駆け上がることになっていました。坂の上の約200メートル離れた所に駅があります。しかし、その逃げ道は津波で水没しました。

幸運にも、大船渡市の平田武市議の発議で、大震災の3月間ばかり前に、校舎2階と崖上の道路をつなぐ非常通路が設置されていました。その非常通路は長さ約10メートル、幅約1.5メートルの橋です。

3月11日の大地震直後、当時校内にいた71人の児童と教職員は、その新しい非常通路で、全員避難して無事でした。



救出直後、非常通路の橋も津波をかぶりましたが、児童の命を救ってくれました。

平田武市議の願った非常通路が越喜来小学校の児童を救い出しました。非常通路から避難した子供の中には、平田さんの3人の孫もいました。残念ながら、平田武さんは震災の9日前に病気で亡くなっていました。

越喜来小学校の向かいの児童公園も破壊されました。現在、そこに仮の記念の場所があります。



その日の夜に、絆・グループは今野さんご夫婦の家に招待されました。今野さんは大船渡市の市民のオンブズマンです。今野さんの計らいで、絆・グループは大船渡の市長や校長、地区公民館館長などと連絡を取ることができました。本当にいつも

大助かりです。日本人とドイツ人の「絆」メンバーは美味しい手料理を食べながら、たくさん話をしました。

#### 4月8日（日）

今日は私たちはみんな一緒に働きました。活動場所は大船渡港のとなりにあるサンアンドレス公園でした。活動内容は5月のイベント準備のためのゴミ拾いでした。午後のみ、5人のボランティアが近くにある倉庫に一時間手伝いに行きました。

その公園は湾整備事業の一環で1992年に完成しました。公園のネーミングは、1611年、大船渡湾に入港したスペインの探検隊と関係しています。

震災前は美しい公園でしたが、現在は被害地になってしまいました。津波で木が倒れて、芝生と灌木が枯れました。金属でできた芸術作品が曲がってしまいました。辺り一面に瓦礫やガラスなどが散らばっていました。



公園のトレードマークは近代的な展望台です。展望台の手すりも大きく破損しました。





今日は、私たちはここで枯れた木の根を引っっこ抜いたり、散らばっているガラスの破片やがれきなどを拾い集めたりして、その公園を片づけました。私たちは有機廃棄物やガラス、がれきなどを分別して、いろいろな袋へ入れました。

仕事中、海のそばの公園では冷たい風が吹いていました。再三、砂ぼこりが吹き上げました。

仕事の終わりに、東日本大震災復興支援プロジェクトのOne Love大船渡実行委員（村上さん）がちょっとスピーチをしました。



ここは5月の連休に「けせんふえす2012」というイベントが行われるので、そのための準備です。「けせんふえす」とは、気仙地域の復興と未来のためのフェスティバル企画です。公式ホームページによると、「未来の輝く故郷を創造するための第一歩としてフェスティバルを開催」する予定です。ここが市民の憩いの場に戻れますように...

ちなみに、友人の話によると、たくさんの方が「けせんふえす2012」に参加したそうです。子供も大人もイベントを喜んでいました。

初日の5月4日は豪雨の為中止になりましたので、5月5日の一日だけではありませんでしたが、こどもの日は晴天に恵まれ、素晴らしいフェスが行われました。



「けせんふえす2012」、サンアンドレス公園（写真の出典：egao311.info）

たくさんのブースが並び、朝からかなり賑わっていました。地元屋台ブースやスポーツ体験ブース、ファミリーセールブースなどがありました。展望台の前には音楽ステージがありました。

その他には、大船渡港ではいろいろな船が入港しました。

4月9日（月）

午前9時に、私たち皆は大船渡市・猪川町長洞（いかわちょうながほら）にある長洞仮設住宅を訪問しました。



センターを9時半頃出発し、団地まで歩いて行きました。集会場を兼ねている公民館一但し名前で、単なる集会所一に着くと、齋藤さんとほかの役員の方が6人ほど集まっていたらっしゃいました。齋藤さんが唯一の男性だった。（齋藤さんは数年前まで「かもめの玉子」メーカーとして東北で有名な「さいとう製菓」の副社長をされていたそうです。）

まず、齋藤さんの挨拶がありました。私たちは仮設住宅の生活条件について自治会役員と話し合いました。この団地の問題点が懇切丁寧一やや間延びした一で紹介されました。その後質問に入り、女性の役員の方からの答えで具体的な問題点が浮き彫りにされました。



大船渡市では大津波で3629戸が全壊または半壊しました。339人が亡くなりました。そして、今まで98人が行方不明です。建物被害も恐るべきものでした。5308世帯が被害を被っていました。3892の住宅は全壊または半壊していました。そして、1416戸の住宅は一部損壊しました。

避難者の数は3月15日ピーク時に8737人でした。7500人ぐらいは応急住宅を要しました。

それで、大船渡市内の37か所では去年の4月から今まで仮設住宅が建てられました。現在、完成戸の数は1801戸です。

入居できる人は、居住する住宅が半壊以上の被害を受け、その住宅に住めなくなった人か、住宅が損傷を受け、取り壊して再建するまで、仮住居を必要とする人です。それに、二次災害の恐れがあり、その場所に引き続き居住できない人も仮設住宅に引っ越すことができます。

原則として家賃なしで住んでいます。2年間を限度とします。しかし、ガスや水道などの費用は負担しなければなりません。

長洞仮設住宅は総合公園予定地（公園かけ）の中に建てられていました。その団地には308戸の仮設住宅が設置されました。団地は三つのブロックに分かれています。



情報提供義務がないので、人口数は分かりません。家族も一人暮らしの人もいます。現在、ここに33人の一人暮らしの人が住んでいるそうです。家族の人数が6人以上だったら、その家族は2戸の住宅に住むことができます。子供（小学生）は10人ぐらいです。

大地震前に、ここに住む人々いろいろな町の出身で、8か所以上から、ここへ来たそうです。だから、彼らには、非知り合いがいません。だから、大きな問題は、大津波によって心的トラウマを受けた人々がしばしば一人の生活を送っていることです。本当に大問題です。

大船渡市の支援員が仮設住宅についての事務関係の仕事を代行しています。（その特別職のために、市の行政は100人の支援員を雇っています。）長洞仮設住宅では13人の支援員が働いています。

3月の下旬から仮設住宅の自治会もあります。ここの住民は10の家族に一人の自治会役員を選んでいました。彼らは生活と隣付き合いの向上を図るためのとなり組と同じような組織です。

直接話し合いをした後で、私たちは3つの家族から住宅に招待されました。彼らは私たちを温かく迎えて、家を見せてくれました。私たちみんなはその出会から忘れがたい印象を受けました。

たとえば、齋藤さんの家も訪問しました。齋藤さんの奥様は人気歌手です。民謡歌手として全国大会でも優勝しました。

しかし、大地震後以来、彼女は歌っていませんでした。悲しみのあまり声がつぶれてしまっていたのですが、別れの際に、家の前でまだ歌い始めました。目頭が熱くなるような東北の民謡を歌ってくれました。その後で、1人の絆・メンバーがお返しにソロを歌いました。



齋藤さんご夫婦

次の家では、親切な91歳のおばあさんと話し合いました。別れの際に、彼女は思いがけなく床を離れて、家の前に出てきてくれ、私たちと心をこめて握手してくれました。



最後に、仮設住宅の付近にある共同の野菜畑を見に行きました。そこではじゃがいもなどを栽培しています。  
「チャイルド・ファンド・ジャパン (Child Fund Japan) はその「友結 (ゆうゆう)」というプロジェクトを実行しています。



午後は大船渡市猪川町から釜石を経て大槌町に貸し切り小型バスで行きました。

大槌町（おおつちちょう）は、東日本大震災による津波で大きな被害を受けました。臨港地区では津波の高さは12メートル以上でした。海岸から3キロ内陸まで津波は氾濫しました。



大槌町： 図の赤い部分 = 津波氾濫地

津波後に、火災が広がっていました。津波と火災で、10人に1人が亡くなりました。全人口約1万5千人のうち死者・行方不明者は合わせて1353人でした。3585戸の住宅は全壊または半壊していました。住宅の60パーセント以上なので、現在もたくさんの仮設住宅がありました。



大槌町を通り過ぎると大槌病院が見えました。大地震の日、津波はその病院の周囲を襲いました。



患者は恐怖の時間を過ごしました。患者は屋上へ連れて行かれました。そこで寒い夜の苦しみに耐えました。

大槌町では、遠野から来たまごころネットのスタッフと会って、「まごころ広場うすぎわ（白沢）」に行き、「お休み処（キューブハウス）」でミーティングをしました。「まごころ広場うすぎわ」は大槌町白沢地区にあるコミュニティスペースです。



キューブハウスは去年の12月に、仮設住宅のそばに建てられていました。仮設住宅では92の家族（= 210人）が住んでいます。キューブハウスは多目的建造物です。

私たちは二手に分かれました。建築家のグーチョさんは長部・公民館の施工図について遠野まごころネットのスタッフと詳細な相談をしました。

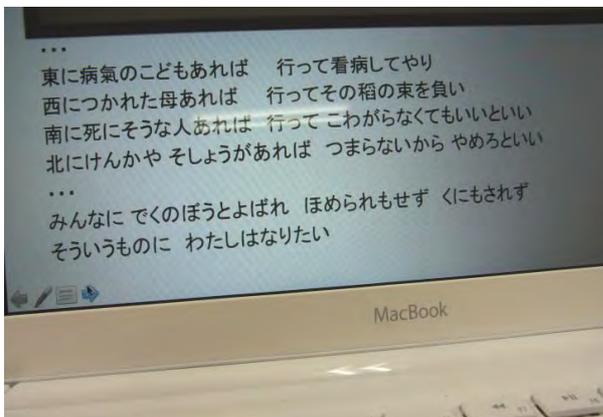
残りの人は臼澤さんの話を注意深く聞きました。大津波の日、臼澤さんは彼の家と一緒に津波で流されましたが、いくつもの偶然に助けられて命を救われました。それ以来、大槌町の復興について一生懸命に働いています。

現在、彼はまごころネットの副理事長とまごころ広場代表です。



彼は次のような意味のことを言いました：

仮設住宅の間のコミュニティをつくる予定です。いままでは避難所でしたが、本当の意味でコミュニティセンターに転換する予定です。問題は被災者の雇用の場の消失やコミュニティの崩壊、仮設入居者の孤立化、農・漁業者の困窮などです。だから、被災者のケアには、彼らに寄り添ってあげることが大事です。それで、コミュニティづくりは地域が主体です。いろいろな植物を食用に栽培することもとても必要です。

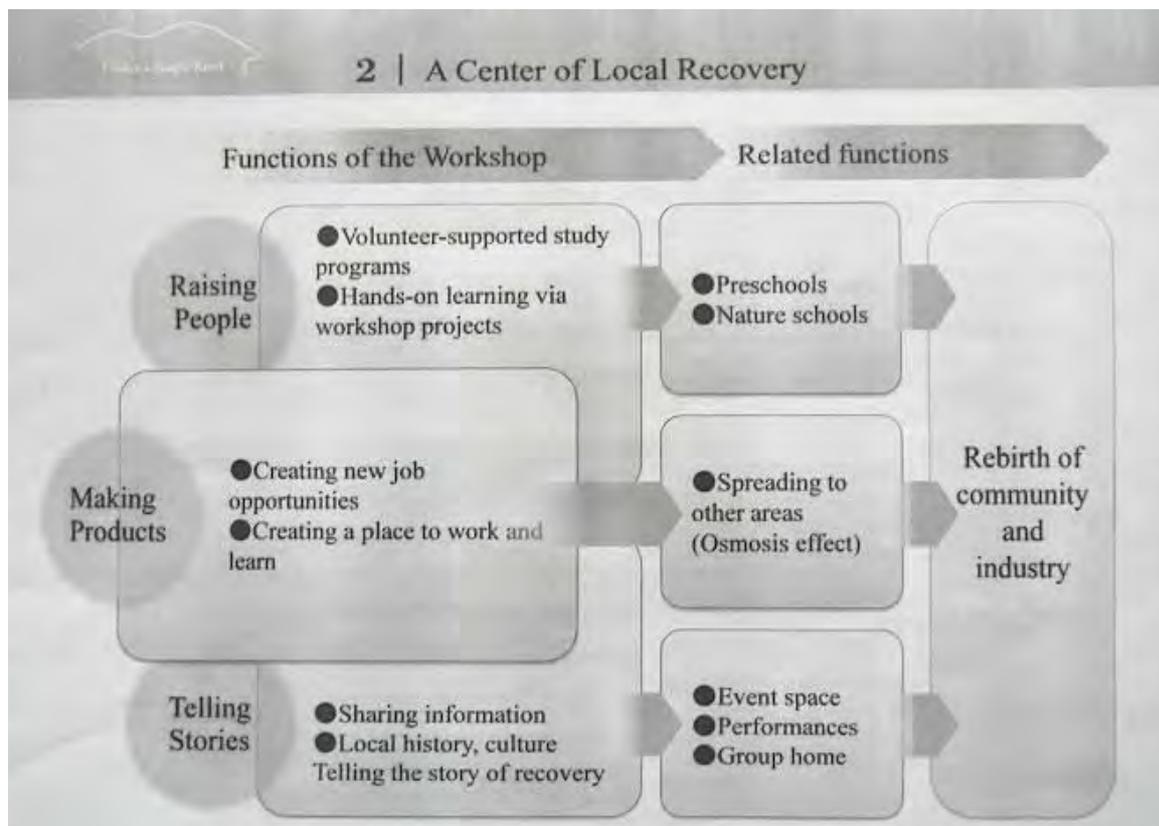


それで、家族の菜園が造られています。コミュニティの復活には伝統芸能の復興も重要です。これで職場を作ることができます。大志としては「まごころ広場」から「まごころの郷 (=里)」に転化して、新しいエコロジーな町を建てることです。

現在、3か所で、コミュニティセンターが誕生しています。そのセンターは大槌町の「まごころの郷1」と『まごころの郷2』と他の大槌町吉里吉里にある場所です。この5月2日にオープンした『まごころ広場うすざわ』のコミュニティスペースが『まごころの郷1』のコミュニティセンターになっています。ちなみに、「臼沢 (うすざわ)」は地名なので、臼澤 (うすざわ) さんとは関係ありません。

例えば陸前高田市の長部でも、いくつものコミュニティセンターと呼ばれる施設が第一歩として考えられているように、そういったところから一歩ずつ新しい「未来都市」が発展して行ってほしいと思います。

それに含まれるのが、新しい考えとして、経済的 (エコノミック) な生活基盤を環境に配慮した (エコロジカル) 視点において発展させるということであり、また古い、地域に根差した伝統を過去に立ち返って意識し直し、すべての面において都会と田舎のあいだでのバランスを見つけ出すということです。計画されているのは、「一つ屋根の下」という合言葉のもとに、公民館や学校、また種々の伝統的な手工芸のための作業所の建設です。



私たちはこの計画をすでに旅行前に聞き知り、それが納得の行くものでありかつ具体化できるものと受け止めました。しかし、「遠野・まごころネット」には経済的な基盤がありません。「絆・ベルリン」では、すでに可能性のあるドイツのスポンサーを公民館建設のために視野に入れていますが、そしてまた現地でも、この考えが

実現できるということをわかってもらおうと思っています。そういうわけで、私たちはそのための場所をいろいろ下見しようと思いました。

それで、ミーティングの後で、まごころネットのスタッフは福沢先生と建築家のグーチョーさん、山田ボヒネックさんと、私と一緒に 公民館が建設できそうな場所を見に行きました。他の絆・メンバーは大船渡に帰りました。

4つの建設予定地がありました。第一の予定地は今回の集会場にある広場（＝ まごころの郷1）でした。

第二の候補は山に向かって走り、2キロほど内陸に入ったところ（＝ まごころの郷2）にありました。広さは十分でしたが、午後の早い時間から陰になってしまいます。



まごころの郷2

さらに町から昇り坂になっていて、自転車などでは行き辛いのではということで余り感心できませんでした。その結果として、理想的な立地ではないということになりました。

第三の候補地は海沿いに山を越えた湾で、吉里吉里（きりきり）と言う地域でした。吉里吉里は大槌の町中からたった3キロメートルぐらいしか離れていない船越湾にある区域です。

巨大地震のとき、高さ16メートル以上の津波が吉里吉里を襲いました。湾東側で津波の高さは想像できない22メートルでした。



吉里吉里： 図の赤い部分 = 津波氾濫地

背の高い巨人の手で投げ飛ばされたかのように、5～6メートルの堤防は津波で砕かれました。



吉里吉里の人口は4200人です。この地区では750戸のうち300戸が全半壊の被害を受け、死亡・行方不明者は88人だそうです。

連れて行ってもらった場所は吉里吉里半島に向かって、湾を見下ろす高台になっていました。そこから素晴らしい海への眺望もあります。しかし、同時に惨事の全容も見られます。

現在、ここに「吉里吉里国」という仮設小屋が建っていました。



吉里吉里国 は、井上ひさしの小説『吉里吉里人』に登場する架空の国ですが、大槌町吉里吉里で活躍しているNPO法人は同じ名を名乗っています。

小屋の前で NPO「吉里吉里国」の理事長羽賀正彦氏が出迎えてくれました。そして、私たちは土地をじっくり見て、津波による損失について考えました。公民館の建設計画についての得失を考量したら、最終的に私たちみんなは吉里吉里半島が新しい公民館について適切だという判断にいたりました。

高台からの眺望はすばらしく、福沢先生とグーチョンさん、そして、私もここが気に入りました。

しかし問題は、ここは大津波に襲われ、高台に遭った建物（神社など）も流されてしまったのでした。高台の一番上にある神社しか残りませんでした。そこは、軽い被害しか受けませんでした。



高台は標高11メートルで、3・11の津波は15メートルあったので、海岸線が損傷を受けました。たくさんの木が流失・倒伏し、大地が押し流されました。



現在、斜面を幌で浸食しないように守っています。

根本的問題がもちろんあります。500年に一度の大津波に耐えられる、あるいは襲ってこない場所に家を建てるのが適切なのかという問題です。そのような土地はこれまでの町があった場所にはありません。では高い、つまり15メートルもの防潮堤を建てるのかというと、壁に囲まれた海の見えない町になってしまいます。

第4の候補地は山の中にあると言われていましたが、大分遅くなっていたし、ものすごい風が吹いていたのと、この湾を見下ろす高台が余りにも気に入ってしまったので、もうたずねては行きませんでした。

ちなみに、ベルリンに帰ってすぐに、スポンサー捜しはうまくいきました。

4月27日に、福沢先生と私はボッシュ財団のベルク事務総長と会って、「一つ屋根の下」について話し合いました。

1か月過ぎて、ベルクさんとティッシャーさんは東北に行って、公民館・プロジェクトについて視察をしてくださいました。ティッシャーさんはボッシュ財団の国際理解促進部プロジェクトリーダー（日本・中国・インド担当）です。

東北への出張が彼らに大きな印象を与えました。ボッシュ財団は公民館を支援することにしました。「一つ屋根の下」のプロジェクトの為に200,000ユーロ（現在約2000万円）を出すと決めました。

#### 4月10日（火）

今日は大船渡滞在の最後の日になりました。二手に分かれました。福沢先生と私は立根町公民館とロータリークラブ、大船渡高校を訪問し、残りは仮設住宅の近くにある私有地でボランティア活動に行きました。

その土地のオーナーは津波の被災者に遊休土地を野菜作りに供しています。ちなみに、彼女もしばしばボランティア活動をしています。

絆・グループは種まきのために土地を準備しました。粘土質の大地をふるいに掛けて、石を拾い集めました。



同時に、福沢先生と私は大船渡市でハードなスケジュールが重なっていました。今野さんが車で迎えにきてくれました。

まず、大船渡市立根地区公民館館長の今野龍雄氏を訪問しました。



今野龍雄氏

東海日報記者の三浦住恵さんも立ち会って、筆記していました。今野氏は本当におもしろいことを言いました。公民館は市民の交流を進めるために活動し、集会場として使われる。住民の間で問題が出てくれば、公民館内で話し合い、館長が市役所に持ち込んでいます。それとボランティア活動の拠点としても使われるそうです。

次で、11時に大船渡西ロータリークラブに行きました。会長と副会長、さらに前年度の会長、副会長の4人の方が相手して下さいました。我々は昨年大船渡の高校生をベルリンに招待したく、企画を練っているのですが、学校側ではさまざまな障害があり、協力できないから、我々だけでやってほしいとの答が来ています。我々としてはやはりある団体と協力し合いながら実現したいので、ロータリークラブの協力の可能性を打診しに来たのですと自己紹介をしました。

会長の金氏の答は、趣旨はよく分かるが協力できないだろうとの事です。今回の大災害でロータリーメンバーの多くの方が被害を受けて、例会に半分も出席して来ない現状なのです。できれば他のロータリークラブ—例えば東京のとか—が協力してくれるならできるかもしれないとの答だった。ベルリンや東京で打診してみますと引き下がりました。

午後の最初のアポは市役所だった。生活福祉部地域福祉課の三上課長補佐と山岸健悦郎係長と会いました。ドイツから支援できる適当なプロジェクトがあるかどうか話してもらいました。

学校児童の放課後の集会場建設のプロジェクトが1000万円ぐらいで建てられるので、どうかと言われました。具体的な内容を連絡してもらうことをお願いします。それと市長から聞いた環境未来都市についてもっと説明をお願いしましたが、まだ決まったばかりで具体的な内容は無いとのことでした。

最後に昨年2度も訪問した大船渡高校に訪れました。校長は新任の夏井敬雄先生でした。昨年お会いし、我々の申し出に協力できないというメールを書かれた伊藤正則先生もいらっしゃいました。お二人の意見は、やはりいい話だが、学校としては主体的に取り組めない、ロータリークラブなどとの共催でやってもらうと安心して生徒を送り出せるのでその方向で検討してほしいとのことでした。

福祉の里センターに戻り、お別れ会の準備をしました。午後6時ごろに、「遠野まごころネット」の及川さんと末田さん、ポルチーノさん、大槌町から臼澤さん、大船渡市役所の山岸さん、長洞仮設住宅団地から4人の居住者（齋藤さん、安城さん、金野さんと例のお孫さん）、Child Fundの合澤さん、佐藤さんご夫妻、野さんご夫妻、が絆・ベルリンの招待で来ました。「絆・ベルリン」のメンバーが12人、14お客様、26名ほどでした。

6時半過ぎに開会の挨拶をしました。福沢先生、私はちょっとスピーチをしました。山田ボヒネックさんは同時通訳をしてくれました。そして、オードブルやお寿司、それからみなさんが持って来られたおでんなどをつまみながら、ビールやワインを飲み、話が少しずつ弾んできました。





会食後に、皆で輪になって合唱していました。絆・グループの中の最年少者のじゅんさんは独唱をしました。



最後に、客を戸口の外まで送って、さようならと手を振っていました。食べ物と飲み物は大余りに余ったが、車で来られた及川さん一向に全て持って行ってもらった。本当に、ではまた近いうちに、と皆さんと会いたいですよ。



その後「絆」メンバー全員が女性軍の部屋に集まり、最後のミーティングをしました。一人一人発言し、今回のボランティア活動に参加できて本当によかったと言いました。これほど充実した10日間を過ごせて幸せだとの発言が続きました。夜中過ぎに何とか寝床に入りました。

#### 4月11日(水)

今日はグループを解散しました。朝早く、みんなと別れました。たいていの絆・メンバーは東京方向に出かけましたが、妻と私はバスで遠野に行って、遠野市観光協会の副会長を会いました。

彼女と遠野まごころネットのポルチーノさんは私たちが遠野駅の前で迎えに来てくれました。



私たちは彼らと一緒に「遠野市観光交流センター」を訪問し、たくさんの冊子やマップなどをもらいました。その木造建築物はほんの一週間前にオープンしました。

東北の観光事業も大地震の余波を受けているので、ドイツでちょっとPRをするつもりです。

その後で、私たちみんなは「岩手県遠野市の遠野文化研究センター」を見に行きました。

そのセンターのスタッフが、東日本大震災の津波被害に遭った近隣自治体から持ち込まれた資料などの修復作業を続けています。同センターは震災前、地元の文化研究機関として4月に発足予定だったが、震災を受け、修復などを手がけています。

たとえば、大船渡市と大槌町の図書館からたくさんの本と書類が救出することができました。海水を浴びた冊子を乾燥させて、異物を取り除いたり、洗浄したりと丁寧な作業が続いています。



その後で、我々のためにも今回の絆・プロジェクトが終わりました。私たちは電車と新幹線で北へ向かい、青森県にいる友達に会いに行きました。



雪の国

最後の9日間を振り返ると、去年と比べて、良い方向に光景が変わっていました。半年前に訪れた被災地の現状に私たちは感銘を受けました。去年の秋から、たくさんの作業が行われ、復興が進んでいます。そして、今回のボランティア活動はメンバーの気が合ったせいか、それと共同生活の心得を知っているメンバーがほとんどだったせいか、毎日が非常に気持ちよく過ごせました。



それと被災地の皆さんと感動的な出会いが何度もあり、深く心に残るボランティア活動になりました。

Dr. Frank Brose / Berlin

## 付録

### ヨーロッパに住んでいる絆のメンバー

Dr. Frank Brose	地質学者	ドイツ人
Dr. 福沢 啓臣	元日本学先生 (ベルリン自由大)	日本人
Johanna Golla	社会教育学士	ドイツ人
Gabriel Innes	気象学学生 (ベルリン自由大)	ドイツ系カナダ人
Brigitte Jogschies-Brose	ソーシャルワーカー	ドイツ人
ジュン・キノシタ	学生	日系ドイツ人
小林 亜未	教育学学生 (フンボルト大学ベルリン)	日本人
Lutz Paulsen	専門職 (ベルリン州刑事局)	ドイツ人
Axel Rohde	建築家	ドイツ人
Dr. 山田ボヒネック 頼子	日本語講師 (ベルリン日独センター)	日本人

### 日本に住んでいる絆のメンバー

阿部 護	職員 (障がい福祉サービス事業所)	日本人
Jörg Gutschow	建築家	ドイツ人
廣瀬 芙美子	年金者	日本人
村瀬 靖昌	翻訳者	日本人
村松 庄次郎	年金者	日本人
今野 みつこ	介護・ソーシャルワーカー	日本人
今野 定志	民生委員、年金者	日本人
鶴岡 邦夫	会社員	日本人